

図9 現代のハングル

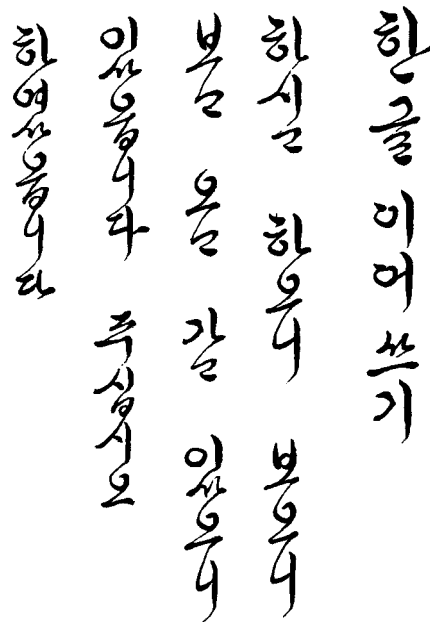
a) 新聞広告における印刷書体の例



서 唇입곱살의 가정주부 김경숙씨(서울 논현동). 김씨는 요즘 새 인생을 살아가는 느낌이다. 그동안 버리고 버리던 영어공부를 드디어 다시 시작했기 때문이다. 대학을 졸업한지 꼭 15년 만이다.

김씨는 남편이 출근하고 아이들이 학교에 가고 난 뒤 매일 오전 10시부터 정오까지 꼭 영어공부를 한다. 30대 초반부터 영어공부를 해야겠다고 몇 번이나 마음먹었다. 그러나 아이들 키우고 남편 뒷바라지를 하느라 마음대로 되지 않았다. 가끔 CNN이나 AFKN을 틀어놓고 영어공부를 한다고 나섰으나 자심삼일이 되기 일쑤였다. 내용이 모두 외국의 문제들이라 들어도 무슨 얘기인지 이해하기 힘들어 중간에 그만 두곤했다.

b) ハングル書道の例(草書体)



「国語の機械化」問題は、ハングルの場合、字母を音節ごとに組み合わせる文字を構成するため、中声(母音)字母の形によって初声(子音)字母の形と位置が変わり、終声(音節末子音)字母が独特の形を必要とする上に、その有無によっても初声中声の字母の形と位置が変化するので、1つの字母に形の異なる複数の字母キーが必要で、印字に多くの手数を必要として効率的でなく、テレタイプやタイプライターなどの機械装置に組み込みにくいのに対し、「横一列書き」にすれば、字母キーの数を減じて機械類に組み込みやすく、印字の効率をあげることができることから起こってきた問題である。1949年、ハングルの字体を打ち出すことを可能とするテレックス方式が考案された(公炳禹, 1949)。機械に組み込む際の難点は、字母キーの種類を多くして印字に手数をかければ、字形は整うが時間を要し、字母キーを少なくすれば、印字速度は速くなるが字形が醜くなるという点である。1962年、宋啓範によって考案されたタイプライターはこの難点のある程度解消したとされ、機械利用に関する問題は大いに進展した。字形の見やすさと印字効率との関係は依然として残り、論議が加熱する傾向が見られたが、1969年国務総理訓令として「韓国打字機標準字板」が制定されて一応の結論を見た。1980年代からは、ワードプロセッサなどで電算機処理の方法が発達して、字形と印字効率の問題はほぼ解消し、情報通信技術の発達によって、現在では「機械化」の問題はほとんど解決したといっ

よい。

【参考文献】

- 洪起文(1946),『正音発達史』上下(서울新聞社,ソウル)
 Bak Eui-Seong(1955),『国文の歩んできた道』(教育図書出版社,ピョンヤン)
 李秉岐,白鐵共著(1963),『国文学全史』(新丘文化社,ソウル)
 李基文(1970),『開化期』(一潮閣,ソウル)
 金敏洙(1973),『国語政策論』(高麗大学校出版部,ソウル)
 ———(1980),『新国語学史(全訂版)』(一潮閣,ソウル)
 金東旭(1974),『朝鮮文学史』(日本放送出版協会)
 高永根編(1989),『北韓のことばと文字(北韓の認識7)』(乙酉文化社,ソウル)
 姜信沆(1993),『ハングルの成立と歴史』(大修館書店)
 高永根(1994),『統一時代の語文問題』(図書出版 GilBeod,ソウル).
 河野六郎(1994),『文字論』(三省堂)

【参照】 漢字圏の文字,東アジアの諸文字 (大江 孝男)

パンジャープ語の文字 Pañjabī = グルムキー文字.

パンパンゴ文字 英 Pampango = フィリピンの文字.